

第3回 北九州市発達障害者支援地域協議会「調査・骨格検討部会」議事録

- 1 会議名 第3回 北九州市発達障害者支援地域協議会「調査・骨格検討部会」
- 2 開催日時 令和3年9月27日(月) 19:00～20:15
- 3 開催場所 WEB会議 (Microsoft Teams を使用)
- 4 出席者
 - (1) 委員 (敬称略)
倉光晃子 (部会長)、今本繁、天本祐輔、友納優子、尾首雅亮、小西友康、金光律子、竹下美穂子 計8名 (2名欠席)
 - (2) 事務局
精神保健福祉課長 安藤卓雄
- 5 会議次第
 - (1) 議題
実態調査の内容について
 - ※ ①本人向け ②家族向け ③福祉事業者向けの調査内容について協議
 - ※ 調査の進め方、対象者等について協議
- 6 会議経過 (意見交換)
事務局から協議資料について説明を行い、各委員から意見を伺った。

【部会長】

まずは、実態調査の進め方、調査対象者について、実態調査の進め方としては、主に電子調査をベースに進めていくということ。また、調査対象として、基本の手立てに加えて強度行動障害の調査も同時進行に行うので、福祉、教育、医療、専門機関は、強度行動障害の調査と基本の手立ての調査と共通で実施していくこと。特に事務局からは、一斉調査の対象外として、保育所、幼稚園、こども園、高等学校、大学、一般企業は、限定したヒアリングによる調査を実施してはということと提案があった。

実態調査の進め方、対象者について、ご意見等いかがか。

【委員】

事務局から提案された、後で調査を行うというのは、アンケートの数やスパンの短さを考えたら、それでよいと思う。

【部会長】

事務局からの提案について、保育所、幼稚園等の調査は別途ヒアリングということで、ご賛同のご意見をいただいた。

他にご意見いかがか。

【委員】

保育所、幼稚園、高等学校、大学もヒアリングということか。ヒアリングは、一般企業の方だけではないのか。

【事務局】

ここについては、実は会議直前まで部会長と協議していた。なかなか一般の方にはわかりにくく、少し専門性というか難しい言葉も多い調査なので、説明をしながらでないとは理解しにくい部分もあると感じており、小学校を実際に調査対象としたとき、どういう回答になるか見ながら判断しようと思っていたところこのように書いている。特に保育所、幼稚園に関しては、やはり第一部会、早期支援の議論とか、或いは個別に今、小児科の先生方とチームで研究事業を行っている早期支援システムのこともあるので、数を絞ったとしてもヒアリングは最低限必要なのではというところが、皆様の意見を聞いての落としどころになるのかなと部会長と話していた。

絞り込んだ形で調査票をめくりながら話を聞くという形で、保育所、こども園、幼稚園関係者の方については考えているので、統計的なデータには入らないと思う。

【委員】

研究事業や4・5歳児健診などと絡めて、ヒアリングの後にアンケート調査をできるようにしてもよいのではと思った。

【事務局】

早期支援システムの研究の経過も含めてのアンケートを行うのであれば、アンケート調査の方がよいのかなという思いもあった。

【委員】

今回の調査対象は、ある程度絞り込みが必要で、事務局からの提案でよいと思う。

保育所、幼稚園は、先ほどから言われているように、4・5歳児健診プロジェクトの進行中でもあり、調査に加えること自体はよいとは思いますが、どちらかというとも高等学校や大学より、発達障害に対する理解は、保育所、幼稚園のスタッフの方がむしろ高いと思う。おそらくアンケートにも十分に答えられる素地があると思うが、そのプロジェクトの結果を基にして、二度手間になるが、そういうことが起こっているという意識を高めた上でアンケートという形でも、今回のアンケートと併せてのデータとして評価の対象にはなるのかなと思う。

今回は、事務局からの提案のように、保育所、幼稚園、高等学校、大学は、特に熱心なところのヒアリングに留めても構わないと思う。

【部会長】

幼稚園、保育所、こども園は、基本の手立てに関する質問調査項目を提示しても比較的理解が可能なのでは、まず限定されたところでのヒアリングで状況を見て、更なる調査という展開でどうかというご意見をいただいた。

幼稚園、保育所、こども園は、まず早期発見、早期対応でつないでいくべき機関であり、幼稚園、保育所等では、個別の教育支援計画や連携体制を取るよということもあるので、関係者は知識やシステム等についての情報を把握していると思うが、ひとまずヒアリング等を限定的に行ってから全面的な調査ということで、段階を追って進めていくことでよいか。

(委員一同、同意)

その他の高等学校、大学、企業等は、実態調査の項目を見ても回答が難しい、理解のところで課題があるかもしれないということで、ヒアリングで進めていくということでご意見いただいたが、その他、調査対象、進め方等でご意見いかがか。

それでは、調査対象、進め方については事務局からの提案通りで検討を進めていきたいと思う。

次に、実態調査の項目について、先ほど事務局から、当事者向け、家族向け、関係機関を代表して障害福祉サービス事業所向けの調査項目等を提示して説明いただいた。特に選択肢等に含まれる表記の内容や専門用語について、どのように示したらよいか意見をいただきたいとのことだった。ご意見いかがか。

【委員】

先に教育向けのアンケート原案を見させていただいたが、他のアンケートと見比べながら率直な印象として正直難しいと思った。

事務局側の意向として、少し専門的な分野にも踏み込んだ調査によって、どの程度基本的手立てというものが認知されているかを把握したいという意図はよくわかるが、印象として難しいと感じた。どの程度の内容にすればよいのかについては、用語の整理も要と思うが、要は先程ヒアリングを行うといった高等学校や大学の方にも分かるようなものが、アンケートとしては負担がないのかなと思う。

まず用語の整理として、手立ての表現が2つあって、「日常生活を支える基本の手立て」と、「日常生活上の手立て」と表記されているところがあり、この2つがどういう関係性なのか、もしくは同じなのか、そのようなところを少し整理した方がよいのかなと思った。そのあたりでもし意図があれば教えていただきたい。

【部会長】

教育機関に対しての調査となると、言葉の用い方のところで難しい面があり、高等学校、大学を対象にするような、わかりやすくかみ砕いた言葉にした方がよいのでは、また、手立てといった表記の統一など、もう少し細かく見ていく必要があるのではということでご意見いただいた。

日常生活に関しての手立てといったところは、質問の意図や文脈のところで表記を調整して示しているところだと思うが、事務局で変えている意図はあるか。

【事務局】

基本の手立ての定義をこの部会で非常に幅広く捉えたが、今回の調査票では用語の仕分けが十分できていない。

部会で議論をしてきたような基本の手立て全体を指すときは、「基本の手立て」という言い方をし、その中で日常生活を支えるツールなどを指すときは、「日常生活を支える手立て」という言い方をすると使い分けをきれいにした方が、読みやすくなるのかなと今日の意見を聞いて思った。そこはまた整理したいと思う。

【部会長】

設問の設定で言葉をもう少しわかりやすく、細かい点で統一していく調整、検討の必要があるということでご意見いただいた。他にご意見いかがか。

【委員】

調査票が難しいというのは、用語がわかりにくくて答えにくいという意味か。

【委員】

手立ての表記が2つあるということは、概念も2つあるのではということ、少し混乱するのではと思った。

あと率直に、アセスメント、心理検査があれだけ多いと、基本の手立てと示しながら、非常に専門的領域に踏み込んでいる。回答できる方はいるだろうが、幅広にとったときに若干難しいのかなという印象を持った。例えば詳しいアセスメントの分類を聞くのであれば、何校とか専門性の高い方とかをピックアップして直接聞き取ることも方法としてあってもよい気はした。広く一般的に広まっているもの以外は難しいのかなと思う。

【委員】

手立てやアセスメントもいろいろあって、それぞれの中身も非常に難しいので答えにくいのではということか。

【委員】

今私たちは基本の手立てを作り上げている段階だと思うので、アンケートの段階で基本の手立てという言葉を使わない方が逆によいのかなと思う。日常生活上の手立てと言われたら、このアンケートに答えながら、これもやっている、あれもやっている、これはできていないとか振り分けができるかなと思う。いずれにしても用語を揃えた方がわかりやすいと思った。

【部会長】

基本の手立ては大きな概念であるにもかかわらず、質問の選択肢がかなり具体的で、かつ専門性が高いものを選択しなければならないという形になっているところが、調査を受ける側にとっては回答が難しく、回答する動機付けが下がってしまうということが考えられるのではということで、もう少しわかりやすくかみ砕いた、少し概念を広くした、例えば、知的能力に関するものとか、行動、情緒面に関するアセスメントというような、一般的な言葉に変えてはどうかというご提案だった。他にご意見いかがか。

【委員】

電子申請でアンケートされるということで、スマホとかで回答する方が多くなると思うが、そうなると文字が多いと非常に読み取るのも難しくなると感じたので、言葉の整理はどこかで必要になってくると思う。

【部会長】

その他、質問事項、表記について、ご意見等いかがか。

【委員】

いくつか気づいたところで、家族向けの1ページ問5について、私の受け持ちの方は小学生が多いが、10歳未満の選択肢はなくてもよいのか。併せて問8に中学校以下の追加も必要では。

2ページ問10のADHDについて、間にスラッシュが入っているのはなぜか。

4ページ目のアセスメントツールで、今研究事業でとっているSDQは入らなくてよいのか。また、小児科や大学病院でも使われるCBCLは入らなくてよいのか。

9 ページ問 2 2 副問 1 で、SST はここに位置付けるべきかとあるが、ここに位置付けてよいのかなと思った。

【部会長】

その他、ご意見いかがか。

【委員】

今回のこの調査は、教育機関に発送して、主に誰が答えることを想定しているのか。例えば小学校であれば教頭なのか校長なのか、深く関わるような養護教諭なのか、主任なのか、それによって随分変わってくると思う。例えば、専門知識がある程度あって答えられそうな人は、詳しい今回の調査に回答してもらい、内容について理解が困難な場合は、高等学校とか大学に後々するような、もう少しかみ砕いた調査といったように、どちらかを選択できるような二段階形式のアンケートというのも1つの手かなと思う。

ただ、その場合は同レベルで、データとして評価できないところも出てくる可能性はあるが、どちらをどれぐらいの学校が選んだかということも、1つのデータになる気もする。そこら辺は可能かどうか、いかがか。

【部会長】

今回、教育機関は特別支援教育に関わる範囲ということで、幅広に対象を設けており、特別支援学校だけではなく、また特別支援学級だけではなく、通常の学級も含まれているところがあるので、先生の持っている情報等で差があるところもあるかもしれないなど、そういったところも含めてのご意見だと思う。

これについて、事務局いかがか。

【事務局】

どなたにお答えいただくかということも含めて教育委員会と、今意見交換をして調整している。例えば小中学校といっても支援級もあれば通常級もあって、答える方によってクラス担任一人一人に撒くのかとか、そこまでやるのかというと障害福祉部の感覚としては、そこまでバラバラにしては、かえって正確性を欠くのではないかと考えている。教員の理解度調査というようなことになってしまいかねない。やはり学校として教育には取り組んでいるわけなので、ある程度学校単位でお答えいただくという工夫が要るのかなと思う。

通常級は一般的にはここまでだとか、支援級だったらここまでやっているというような形で、ある程度違いが調査結果に出てくるように工夫もしつつ、ある程度まとまった見解を出していただく配慮がいるのかなと思っている。

【委員】

今手元に原案があるが、例えば特別支援学級とか特別支援学校の担任が答えたとしても、逆に管理職が答えたとしても、概ね答えること自体は可能な内容にはなっていると思う。

しかし先ほども申したように、例えばアセスメントとか検査の種類とかが網羅されると、そもそもこれは一体どういう検査なのかとか、また、学校現場で教員が実施できる検査はほとんどないので、活用法も含めてこの辺は正直難しいと思う。

専門的手法についても、応用行動分析とか名前を見ると若干難しさも感じるが、その中身とか手立ての細かいところは、実際自分の学校でもやっているというようなものは、いくつも出てくるので、そういったところが少し解消されると、ある程度共通の質問が使えるのかなと思

う。ただ、表現方法を配慮することによって、同じ質問内容でも誰向けとかというものが二段階ぐらい用意されると、より親切かなと思う。

【部会長】

学校現場でも確実に実態が把握できる表記への検討が必要だということでご意見いただいた。例えば構造化とか、環境調整とか、行動の意味を読み取った対応とか、そういった形が、回答しやすい具体的な案になってくるのかなと思う。

他にご意見いかがか。

【委員】

アンケートの上に家族向けと書いてあったので、家族が答えるものだと思っていたが、先生が答えるのか。学校にこのアンケートが来て、家族に答えてもらうということでもよいのか。

【部会長】

家族向け、当事者向け、関係機関向けということで、各対象に分けての調査用紙を作成している。学校に配布したものは、先生に答えていただくという形になる。

それでは先ほど事務局からあったように、10月8日金曜日までチャットで引き続きご意見を募りたいと思う。

時間になったので、事務局にお返しする。

【事務局】

率直に申し上げて非常に荒削りな内容で、用語の整理もできていない。最終的には私たちが考えている基本の手立てを最初に提示した上で調査に進んでいく、そういうふうに仕上げていると思っており、そういう作業はまだこれから。

アセスメントツールも非常に悩んだが、正直申し上げて以前ご紹介した、つばさと市で行った以前の調査項目をそのまま持ってきたものであり、細かいというのも承知の上で、変にまとめるより一旦これでお見せして、そこからまとめ作業を、この辺りはつばさや療育センターのお力をいただきながら、まとめていきたいなと思っている。

表記はわかりやすく、でも内容のレベル感というのはこのレベルを保つ。それをしないと、調査の意味合いが薄れてくると思うので、そこはこだわって仕上げていきたいと思う。

チャット上で、細かいことでも構わないのでぜひご意見をいただきたい。限られた期間で、ブラッシュアップしていきたいと思っている。

傍聴の方々については、本日も意見を伺うところまで時間が取れず申し訳ない。今日調査票の案をお配りしたが、今日お聞きいただいた通り、まだまだ途中段階のものなので、あくまで資料はこの場限りということでご理解いただきたい。最終的にどうなったかお知りになりたいときは、市のホームページをご覧いただきたい。

以上で、第3回調査骨格検討部会を終了させていただきます。